



Title	会話を構成する情報の探索と二種類の調整 : 協応関係と赴きの調整
Author(s)	名塩, 征史
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 12, 41-61
Issue Date	2011-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45205
Type	bulletin (article)
File Information	JIMCTS12_003.pdf



[Instructions for use](#)

会話を構成する情報の 探索と二種類の調整 —協応関係と赴きの調整—

名塩征史

abstract

Searches of information and two adjustments constituting conversation: Interactive partnerships and orientations of activities.

NASHIO Seiji

In conversation, it is indispensable to understand what we are currently doing. However, such cognitive understandings which are left their own do not enable us to practice interactive communication. The reason comes from the fact that the sequence of actions continues based on a 'perception-action' mechanism. And by using it, we can search and pick up the information available to adjust the following actions. This paper considers a way to treat cognitive understanding as the essence of interactive communication. The author assumes that there is a process through which an orientation, called "*omomuki*", is derived from understandings of preceding events and bridges a gap between the cognition and the perception-action mechanism. To entrain the sequence of actions and to participate in the interaction, participants need the orientation to lead themselves to their next action. Using the findings of some video episodes, this paper aims to verify the relation between the interactive communication and "*omomuki*". Furthermore, it aims to correlate the cognition with practices which are in conversation.

1 はじめに

我々が「今何をしているのか」を知るということ、即ち、行為¹や活動の意味を把握するということが、日常生活におけるあらゆる場面に不可欠であることは言うまでもない。

現代言語人類学や社会語用論では、種々の言語行為、ないしコミュニケーション出来事が、何に基づいて、どのように意味づけられるのかについて、これまでに多くの議論がなされてきた。例えば、現代言語人類学の古典的研究で知られるM. Silversteinは、「今ここ」（基点／オリゴ）で生起するある発話（もしくはコミュニケーション出来事）は、その基点に投錨された周囲の環境をコンテキスト化することでテキスト化され（つまり、前後の出来事との結束性や一貫性、社会・文化的意義や効力などが発現し）、その意味論的、語用論の意味がより限定的、一義的なものになると説明した（Silverstein 1993、小山2009）。また、こうした発想をもとに、Mey（2001）では、会話における言語使用者（参与者）は、そもそも「社会的コンテキスト」に状況づけられた存在であり、「各人の生活の諸条件により限界づけられ、力づけられている」（小山訳2005：321）とされている。同書によれば、我々は常に自らが属する「共同体全体の社会諸条件を反映する発話共同体の一員として」（訳 p. 181）言語を使用しているのであり、そうした前提が、様々な言語表現の意味や効力を決定づける上での拠りどころとなる。つまり、ある行為を実践することは、その表現形式や表現者に内在する力のみによってなされるわけではなく、その力は「究極的には、社会に由来する」（訳 p. 183）。同書では、ある言語使用がなし得る行為も、ある文化的／社会的／状況的なコンテキストを背景に行われる「語用実践行為（pragmatic act）」なのであり、その適切性は、ある特定の状況づけられた「筋書き」において判断されると考えられている。このような我々の（語用）実践的な行為、ないしその連鎖によって参与者間で共に築かれる活動の「意味（meaning）」については、よりマクロなレベルへと開かれた捉え方によって議論されるべきであると言える。

一方、エスノメソドロロジーや会話分析など、いわば語用実践的な行為／活動のミクロ社会的な分析においても、その行為や活動が状況づけられ、意味づけられるための「枠組み」について論じられている。C. Goodwin（2000, 2002, 2003）による一連の研究では一貫して、行為ないし活動は、その時その場に並置される知覚可能な複数の出来事が然るべき「枠組み（framework）」を基盤に統合され、理解されるものとされている。ある行為／活動をある「枠組み」の中で統合／理解するというのは、たとえば、その行為に先行して続けられてきた活動と当該の行為を関連づけ、より大きな活動の中に埋め込まれた（embedded）行為として意味づけることなどが挙げられる。さらに、C. Goodwin & M. H. Goodwin（1996）では、そ

▶1 Reed（1996）によれば、生態学的アプローチにおける「行為（action）」とは、環境との関係を変化させる動物個体の方法（mode）であり（p. 90）、「行動（behavior）」は、そのための能力（ability）である（p. 97）と定義される。すなわち、両者は「行動によって行為を実践する」と表しうる関係にある。ただし「行動」は、その場の環境（コンテキスト）から切り離された「一回的／偶発的な動き」という意味合いが強く、本稿における、各参与者の振る舞いのある枠組みの中で、もしくは、先行する出来事との関連で捉える視点に適合しない。したがって、本稿では「行動」と「行為」という用語を厳密に使い分けるのではなく、岡田（2002, 2008）での「投錨的な行為（entrusting behavior）」といった表記や、佐々木（2008）の記述を参考に、現行の活動への参加に関連する各参与者の言語的／非言語的な振る舞いは、知覚的なものも含め（Reed 1996:86）、すべて「行為」と表記する。

それぞれ異なる活動の中である同種のツールが異なる意味を持つ事例を分析し、またGoodwin (2000) では、そうしたツール（またはフィールド）に記されたある種の「境界線 (border / grid)」が個々の行為を意味づける上で必要な枠組みとなっていることを指摘した。このことから、ある枠組みの中に埋め込まれ状況づけられたある種のツールが、より小さな枠組みとなって個々の行為をより詳細に意味づけるような構図が浮かび上がってくる。すなわち、上記のような組織化された活動は、大小の枠組みが「入れ子 (nesting)」の構造を成すものと捉えることが可能となる。こうした意味づけの基盤 (枠組み) の重層構造は他の研究においても指摘される場所である (Gibson 1979/1986、Mey 2001、小山・綾部2009)。

本稿の焦点は、会話の中で成し遂げられる種々の行為／活動の意味づけと、それらの行為／活動の実践との具体的な関連にある。後述するように、上記のような行為／活動の意味づけ (理解／把握) は、個人の認知に深く関わる問題と考えられている (Sacks, Schegloff & Jefferson 1974、Goodwin 2002) が、これまでにそうした認知的な理解／把握と、実践的行為／活動の動的な構築が、必ずしも明確に結びつけられていたわけではない。そこで本稿では、会話を、行為の実践を直接的に調整する知覚的な側面と、多様な言語／非言語的伝達の意味内容を推論的に把握する認知的な側面に分け、その両側面の連携によって活動が多様に実践されるメカニズムを具体的な事例の分析を通して考察する。

2 会話の知覚的側面

2.1 生態学的知覚

「知覚」という用語は多くの場合、何かに「気づいている」、または「注意を払っている」という表現で代替可能なものとして用いられることが多い。しかし、本稿で認知的な側面との違いを明確に示すために、ここでは、J. J. Gibsonによる生態学的知覚論をもとに「知覚」のより具体的な性質を規定し、会話における知覚的な側面とは何か、これを明らかにする。

Gibson (1966, 1979/1986) による生態学的知覚論は、行為を実践する主体性を備えた我々人間や動物 (主体／有機体) と周囲の [環境]²との間で、どのような関わり合いが起こっているのか、その関係性をどのようにバランスよく調整し、我々主体が [環境] の変化にどのように適応するのかについて論じるものである。Gibsonの一連の研究とそれを取り入れる多くの研究 (Reed 1996、佐々木2001、宮崎・上野1985など) によれば、「知覚」とは周囲の [環境] から利用可能な情報を抽出し獲得する能動的な活動を指す。我々は、変化し続ける [環境] とのつながりをバランスよく保つために、知覚した情報を活用して自らの振る舞いを調整している。我々は様々

▶2 本稿で [] を伴って表記される [環境] は、Gibsonによる一連の研究で想定される他の主体を含まない客体としての自然物／無生物対象の集合を指す。

な事象の中に必要な情報を探し出し、次なる行為を実践するためのヒントとして、その情報を活用しているのである。つまり行為主体としての我々は周囲の「環境」に矢継ぎ早に現れては消えてゆくあらゆる事象の中から必要な情報を探索・抽出しなければならない。この「探索・抽出」こそが、即ち「知覚」である。この生態学的アプローチにおいて重要なのは、知覚を能動的な活動として捉える点である。Gibson (1979/1986) によれば、「知覚は刺激に対する反応ではなくて、情報抽出という行為である」(p. 56)。知覚とは、ただ周囲に「見える／聞こえる」刺激に晒されている受動的、感覚的な事実を言うのではない。そうした「見える／聞こえる」様々な事象から、ある事象に対して格別の注意を払い、その事象を他の事象から区別するいくつかの特徴を探し出す行為なのである (Gibson 1966 : 286)。

本来生態学的アプローチは、あくまで主体 (有機体) と周囲の「環境」との関係に焦点を当てるものであるため、原則、知覚の対象である「環境」は「運動しないもの (non-animate)」であり、「環境」は我々とコミュニケーションしないと考えられている (Gibson 1986 : 63)。したがって、我々主体が「環境」の中に利用可能な情報を探索／抽出することは、主体自らが「環境」に対して、もしくは「環境」の中で能動的に動くことで成立すると言わなければならない³。主体の動きと「環境」の変化との遭遇からある情報が自ずとフィードバックされ、主体はその情報を知覚し次なる自らの振る舞いの調整に利用する。それは、例えば、「雨が降り出したことに気づいて傘を差す」、または「進む先の障害物に気づいてそれを避けて通る」といった極めてシンプルな行為の調整を指し、少なくとも、その「知覚—行為」の連鎖に複雑な推論過程が組み込まれているとは考えにくい。Gibson (1967) では、こうした知覚を特に「直接知覚 (direct perception)」と呼び、獲得されたものを含む様々な情報から推論的／間接的に見出される「把握」にとって不可欠なものとして位置づけながらも、そうした間接的把握とは明確に区別している。本稿の議論にとって重要なのは、ある主体の能動的な行為の実践がある情報の知覚に直結し、そして、その情報の知覚が次なる行為の調整に直結するという「知覚—行為」の循環的なメカニズムである。これはいわば「動くための情報探索」であり、知覚は、動き続ける我々主体と変化し続ける環境とのバランスを調整するために継続される情報探索なのである。

次に、以上に述べた意味において知覚的な会話の側面に関する先行研究の知見を概観する。

2.2 ターン・テイキングと協応構造

組織化された会話の在り方を説明する有力な概念として「ターン・テイキング・システム (以下、TTS)」はあまりにも有名である。ここでは、日常的な会話の組織化について、参与者間の活動がどのようにTTSに適応し、もしくはTTSによって制御されているのかを考察したSacks, Schegloff & Jefferson (1974) (以下、SSJ (1974) と表記) を参照し、会話の知覚可能な側面として、その構築的／応酬的展開のメカニズムを概観する。

▶3 主体の「動き」に関して、Gibson (1979/1986) では「動物も人間も、運動のちょうど止み間にではなくて、実際は移動中に環境を見る」(p. 197) のであり、おそらく「静止しているときよりも動いているときの方がよく見える」と考えられており、「動くために知覚しなければならないと同時にまた、知覚するために動くこともしなければならない」(p. 223) と述べられている。

SSJ (1974) では、会話が多様な状況下に広く適応しうる活動であるために、多様なアイデンティティを持つ個人間のあらゆる関係性に応じた相互作用が構築されると述べられている (p. 699)。そのため、その会話にかかる儀礼性の高さによってバランスに差はあるものの、ターン・テイキング (以下、TT) はその時その場に特有の状況に合わせて行われる状況依存的な (context-sensitive) 側面と、そのような、いわばローカルな状況の変化とは無関係により一般的な観念によって動機づけられ、もしくは制御される文脈自由な (context-free) 側面を併せ持っている (pp. 699-700)。同論では、形式性の高い言語活動 (会議、討論、インタビューなど) とは一線を画して日常的な会話を捉えており、前者のTTは文脈自由な傾向が強く、逆に後者のTTは文脈依存的な傾向が強いとされている。つまり、形式性／儀礼性の低い日常的な会話においては、ターンのサイズや性格、即ち、「誰がどのような内容をどのぐらい長く発話権を保って話すか」の配分が予め決められている (pre-allocated) わけではなく、その時同じ状況下にある他の参加者 (co-participant) の立ち居振る舞いに影響を受けながら、自らのターンを保持したり、他者に受け渡したり、奪われたりしているのである。このような相手の参加の仕方に影響を受けながらターンの配分がその都度、状況依存的に決定される 'Recipient design' (p. 728) の分析はその後にも盛んに行われ、特に発話権の「移行適切場所 (TRP)」⁴⁾ における種々の「修正 (repair)」や協同で達成される文の構築について、日本語による会話をを用いた研究 (たとえば、串田2005、西阪2005など) は本稿の議論にとっても示唆的なものである。

このRecipient designをより生態学的に捉え直したメカニズムを、岡田 (1996) では「協応構造」と呼び、会話の場に、ボトムアップ的に組織化された対話者間の呼応関係を見出している。協応構造とは、「要素間での相互作用によって自由度を減じるメカニズム」(p. 57)である。このメカニズムは、個々の振る舞いの自由度を予め限界付けるような、いわばトップダウン式の制御ではなく、変化し続ける環境に適合する形で相転移する不完全指定での柔軟な制御を可能にするものである。普段の何気ない会話における我々の流暢な振る舞いが状況依存的なものであり、且つ、その状況が時間の経過とともに変容し続けるものと考えれば、協応構造のような「動きのあるメカニズム」でなければ、そうした振る舞いの相互作用を制御するには適わない。また、岡田 (2003, 2008) によると、我々の行為は常に相手からの支えを予定しつつ投機的に繰り出されるものである。普段何気なく繰り出す行為に対して、我々は自分の中でその意味や役割を完結した形で与えられず、必ずしも最後まで責任を持ってない。我々の身体は、こうした「行為の意味の不定さ (indeterminacy)」を自覚しつつ、自分の行為の意味や価値を見いだすために、その意味や価値を思い切って環境に委ねてしまおうとする。こうした身体の振る舞いを「投機的な行為」と呼び、一方、そうした投機的な行為を支え、意味や役割を与える役割を「グラウンディング」と呼んでいる (2008:59-60)。つまり、協応構造とは、自分の行為に対して完結した意味や価値を自ら与えられない「不定さ」を

▶4 串田 (2010) における 'Transition-relevance place' に対する邦訳。

▶5 「普段の何気ない会話／行為」とは、岡田 (1996) における表現であるが、本稿で言うところのシンプルな [知覚-行為] によって制御される (すなわち、複雑な推論過程を必要としないような) 会話／行為を指すものと考えられる。

備えた我々が、互いに自らの行為の意味や価値を委ね、支え合う相互依存的な関係において相互作用が自ずと生起するメカニズムであると言える。

SSJ (1974) のRecipient design、および岡田 (1996) の協応構造によって説明されるのは、いわば参与者間で息を合わせ「リズム」を共有し、相互行為を円滑に進行するための同調的動作であり⁶、個々の参与者が会話への参加を実現するための身体的な調整と言えるだろう。それは会話を構成する多様な(マルチモダルな)伝達の知覚可能な側面と具現化された個々の行為の動的な様相を捉えたものである。本稿では、このような〔知覚—行為〕の応酬による参与者間の相互作用を「協応」と呼び、実際に協応が実践されている参与者間の相互能動的な関係を「協応関係」と呼ぶことにする⁷。

3 会話の認知的側面

3.1 認知プロセスによる理解／把握

会話における参与者相互の知覚は、知覚の対象となりうる他者が、知覚者と同様に主体的な存在であるため、参与者同士が相互依存的な関係の中で対峙する場合、互いが知覚の主体であり、対象でもある。そのため、その場に変化をもたらすのが必ずしも自己の行為とは限らず、また、知覚的な行為の結果得られる他者からのフィードバックが幾分予測不可能なものとなる。そのため、参与者間で組織化された円滑な協応の一方で、その場に委ねられた出来事にどのような意味があるのかを推論し理解するための認知プロセスがやはり必要となってくる。本稿の目的の一つは、ある状況下で起こる複数の出来事から得た情報群をある枠組みに基づいて統合し一連の実践的行為／活動としてテキスト化する認知的な過程を再考し、そのような手続きと行為の実践との関連について新たに一考を投じることにある。果たして、複数の参与者による相互行為の動的な展開の構築に、個々の認知活動がどのように関与しているのだろうか。以下では一旦、認知論的なアプローチからコミュニケーションを捉える議論を概観し、個人内の認知プロセスと実践的行為／活動の構築との接点を模索してみたい。

たとえば、Sperber & Wilson (1995) (以下、SW (1995) と表記) による、いわゆる「関連性理論」をもとにこの個人内に起こる認知プロセスについて考えてみよう。同書によれば、我々が日々の生活から得る経験や知識は、記憶の中にある種の情報(記載事項 (entry))として蓄えられている (p. 86)。そうした情報は、コミュニケーションの場に現れる各伝達から認知効果を得るのに必要な想定(群) ([a set of] assumptions)として、いつでも必要なだけ呼び起こされることになる。認知効果とは、被伝達者が既に備えている想定(群)を否定する、支持する、改訂するような効果であり

- ▶6 小嶋・ミハロフスキ (2007) によると、「リズム」とは視線・表情・身体動作といった非言語的な「モダリティ未分化 (amodal) な情報」を基調とするもので、そうしたリズムを他者との間で調整し共有し合うことが「つながり感・共在感覚・共感的コミュニケーションなどを支える底流 (いわば「通奏低音」) となる」と述べられている。小嶋・ミハロフスキ (2009) も参照。
- ▶7 「反応がない」ということも、ある意味では参与者の行為を制限する可能性を持つ。そのため、「相互依存的な関係」と言う場合にはある行為に対する反応の有無を問題にしない。しかし、本稿での「協応関係」は、ある委ねられた行為に対する明確な支える行為があってはじめて成立する相互能動的な関係を指すものとする。

▶8 Sperber & Wilson (1995) によれば、ある伝達の認知効果は、その伝達が影響を与える想定の数が多ければ多いほど大きく、またその伝達の意図が明示的であればあるほどその効果を見出す際の労力が少ないとされる (pp. 127-128)。

(p. 117)、ある意図明示的な伝達から得られる認知効果が大きければ大きいほど⁸、また、その効果を見出す労力が少なければ少ないほど、その伝達が有する関連性は高いとされ (p. 265)、円滑な情報交換の実現には、この関連性を高く保つことが重要であると考えられている。SW (1995) の説明からは、このような伝達と推論を繰り返すことで話し手と聞き手の認知環境が互いに共有部分を広げ、相互理解に必要な状況へと調整される過程を読みとることができる (pp. 38-46)。このような過程は、さらに通時的に捉えてみても、我々が他者とのコミュニケーションを通して新たな知識や経験を蓄積し、学び、自らを変化／成長させる上では不可欠なものであると考えられ、経験的にも否めない事実と言えらる。

しかし、SW (1995) の理論に対しては、多くの批判もある (西阪1995、菅原1996、山梨2000など参照)。その認知システムは、個人内に閉じたシステムであり、外部から (調査者／分析者からだけでなく、当該の会話に参加する他の参加者からも) その実態を確認することは難しい。またSW (1995) による議論は、予め定められた「形式と意味」を結びつけるのに然るべき論理的な思考過程を記述したに過ぎず、現実の会話で起こる動的な試行錯誤の様相に適合するほどの柔軟さを備えているとはいいがたい。つまり、従来の認知コミュニケーション論は、あるコミュニケーション出来事に「意味を見出す」ことで完結する「理解するための情報処理」なのである。

現実の活動は意味の推論だけでは終わらない。推論によって見出された意味が何らかの形で次の出来事の生起に関連していなければ、その推論が活動の実践に貢献したとはいいがたい。SW (1995) が述べるような従来の認知プロセスと先述した [知覚－行為] のプロセスによって調整される協応との間には、容易には結びつけがたい乖離が存在しているように思われる。

そこで、以下では具体的な会話事例の分析を通して個人内の認知と個人間の協応との関連を捉え直し、この乖離を埋める可能性について考える。

3.2 活動の把握と実践

本稿での観察・分析の対象となった会話は、次のようなものである。まず、約200枚のイラストや写真の中から数枚を選び、その内容から連想できる物語を協力して作成するという作業を、12名の日本人大学院生が3名ずつ4グループに分かれて行った。各グループの作業時間は90分程度で、作業開始から60分間の様子をそれぞれビデオカメラで撮影した。本稿に掲載されるデータは作業中に参加者間で交わされた会話を書き起こしたものである (書き起こしデータの表記については [付録] を参照)。

このような会話の中から、まずは各参加者による現行の活動の認知／把握と個々の発話との関連を見てみよう。事例 (1) は、被験者グループi (参加者A、B、C) による会話の一場面である。共同作業の開始直後にBとCはクリアファイルを開き、イラストを選ぶ活動に入り始めていた。その時、Aは自分の目の前にPCがあることで、作成した物語をPCに入力する作業

を任されてしまうことに気づき、1行目の発話を行う。

(1) グループ i : どういうこと?

01 A: そ、[これ誰かさー、得意な人やってよー

02 B: [(→クリアファイル) やー、でもこれ###

03 C: (→A) hh得意もなにも普通に打てばいいじゃんhhh

04 A: なーんでだつてめんどくさいよ###、や、いいよ

05 C: (→A) いや、ぜ、

06 [(→クリアファイル) 最初 [から見よ?

07 B: [じゃ、じゃあさ書いてからさ、

08 一応、やろうよ (画像1)

09 C: どういうこと?

10 A: (→PC) 同時通訳みたいにするから

11 だい [じょぶ、うんうんうん

12 C: [あーあー [あーそういうことね (画像2)

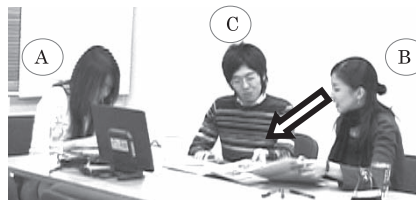
13 B: [hhh

1行目でAは「誰がキーボード入力をするか」ということについての話題を提示しているが、2行目を見るとBはクリアファイルに注意を払っていることがわかる。この状況において、まずCは3行目でAに対して返答する。これらが隣接ペアであることは、Cの視線がAに向いていることに加え、両発話の語彙的結束性（「得意」）を見ても明らかである。さらにCはAから徐々に視線を中央に戻しながら、5行目「いや、ぜ、」を発話し、その直後、Bが中央あたりから開いたクリアファイルに目を向け、Bに対して「最初から見よ?」（6行目）と提案している。この時点で、CはAとの「キーボード入力の担当について話す」活動を保留しつつ、Bとの「イラストを選ぶ」活動に携わる状態にあると解釈できるだろう。

しかし、Bは7-8行目で「じゃ、じゃあさ書いてからさ、一応、やろうよ」と発話する。Bはこの発話を、手元のメモ用紙を取り出し、かつファイルに視線を落としながら行っているため、次発話者を明確に指定していない（画像1）。そのためか、Cは、このBの発話が誰に対する何についての返答かが把握できず、9行目で「どういうこと?」と発話する。その直後、10行目でAが「同時通訳みたいにするから…」と発話し、それを聞いたCは、いつの間にかAとBの間で「どのように作業を進めていくか」を決める活動が始まっていたことに気づき、12行目で「そういうことね」と最終的な状況の把握に至る。ただし、10行目のAの発話は、目の前のPCの画面に視線を向けながら行っているため、Aの振る舞いを観察する限りでは、この発話が7-8行目のBの発話に対する応答であることは確認しがたい。しかし、Cは12行目の発話と同時に、右手をBの方からAの方へと軽く振り、AとBの協応関係を線的に具現する図像的動作を見せる（画像2）。また、このBの発話に対し、Aは、Bに視線を向けはしないものの、「うんうんうん」（11行目）という同意的な発話を重ねており、Cも笑う（13行目）ことで

肯定的に反応していることから、Cがそれまでに携わっていた活動とは異なる活動がAとBの協応のもとで開始されていたこと、そして最終的には3名全員が共通して、その事態を把握するに至ったことを確認することができる。

■ 画像1 08 B:一応、やろうよ



■ 画像2 12 C:そういうことね



上の分析から、(1) の会話の中には「今、何をしているのか」、そして「次に何をすべきか」に関する各参加者の推論的把握の間に「不一致」が認められる。Cは6行目までの時点で、Aとの協応を「キーボード入力」に関する活動として把握し、Bとの協応を「イラスト探し」に関する活動として把握していたものと推察される。そのため、Cはおそらく、7行目から始まるBの行為には「イラスト探し」へと直結するような行為を期待していたに違いない。そのためCは既に「イラスト探し」という活動をBと共に築く前提で次の行為（6行目の発話）を調整していたのである。しかし、実際に7-8行目でBが起こした行為は、Cにとって、「イラスト探し」に結びつけることが難しいものであり、この事態は、Cによる9行目の「どうということ？」という発話が如実に表している。これは単にCがBの行為を「意味づけられなかった」というだけではない。既に「イラスト探し」に取りかかりつつあったCにとって、そのBの行為が「予測されていなかった」ということも意味しているのである。そして、この認知的不一致を速やかに修正すべく、自ずと9行目の発話が繰り返されたものと考えられる。

この9行目の発話のように、個人内の認知的不一致を表明する行為は認知と知覚の連携を示唆するものと言えるだろう。Cは自己の内に認知的不一致を見出したことで、その後の〔知覚－行為〕を、その不一致を解消するためのものへと調整する。そしてその不一致が解消された時にも、その認知が言語的／非言語的に表示されている（12行目）。すなわち、個人内の認知状況が〔知覚－行為〕の在り方に影響を及ぼしているということになる。

認知的手続きは、あくまで個人内に閉じたプロセスであるため、それ自身が個人間の環境に知覚可能な変化を生むわけではない。したがって、出来事に対して「理解／把握」しかしない主体間においては、相互行為は成立しえないのである。しかし、我々が社会的な活動へと参加するためには、〔知覚－行為〕というシンプルな「動きの原理」だけでは、その社会性を十分に補うことはできない。個人間の協応が、活動を築く上で十分に社会的なものであるためには、「理解するための情報処理」としての認知だけでなく、その理解／把握を〔知覚－行為〕へと近づけるもう一つの認知

的な段階を設定する必要があるのではないだろうか。

3.3 赴き

従来の認知プロセスによって推論的に達成された理解／把握から、さらなる認知プロセスによって見出され、保持され、更新される「次に何をすべきか」というある行為ないし活動に対する見通しを本稿では「赴き」と呼ぶことにする。我々は既に起こった行為／活動が「何をしているのか」を事後的に理解するとともに、〔知覚－行為〕の連鎖によって次に繰り出す自らの行為を調整するために、もしくは、他者が次に生み出すであろう変化を評価するために、この赴きを見出している。我々はその赴きを次なる出来事と照合し、その出来事が当該の赴きに関連するものなのかどうかを見極めながら、活動を識別し、進めている。「赴きを見出すこと」は「ある行為／活動を意味づけること」ではなく、赴きは、「今ここ」から先へと向かう方向性を含み、自らの次なる行為に活用され、または他者の次なる行為を識別するにあたって、前提的に指標されるコンテキストの一種である。

例えば、ある参与者Xが他の参与者Yの方を見て、「君」と発話したとしよう。この時、YはXの視線や口の動きなどを視知覚によって獲得し、またXの発話（音声的な刺激）を聴知覚によって獲得する。すなわち、その時その場で起きた出来事を多様なモダリティを介して獲得し、まずはその出来事に気づく段階が存在する。さらにYは知覚されたXの投機的行為を支えるために、すなわち協応するために動き出すが、その一方で、各振る舞いに意味を見出し理解しなければならない。例えば、「君」が持つ意味論の意味は、Yの内に知識として保持されている日本語の言語体系に指標されることで初めて明らかとなる。またその視線の先にいる人物が、その「君」が指す人物であり、それゆえに、今Y自身がXによって指示されることが、Yの内にある語用論的な知識に指標されることで明確になる。さらに場合によっては、日本社会において「君」という表現が目上の人物に対しては使われない表現であること、あまり親しくない相手に使われることが多いなど、「君」という言語使用が含みうる日本社会／文化的な機能がYのもつ経験／知識に指標されることによって判明するだろう。このように知覚された情報を様々な指標すべき「枠組み」をもとに統合し、意味づけを行う認知的手続きによって、YはXによる行為が「Yを指名する」という行為の実践であると推論的に把握することになる。SW（1995）が説明する認知プロセスはここで終了するが、同様の推論的手続きを用いて、Yはさらに、次に何が起こるか、もしくはY自身が何をすべきかについての可能性を探り、次なる振る舞いへと備えることになるだろう。この手続きによって見出されるものが本稿で提唱する「赴き」である。たとえば、YがXに対して「はい」と返事をする 것도、その可能性の一つとして考えられ、実際にYはそうにするかもしれない。しかし、Yによる「はい」という返事に対し、Xが「いや、君じゃなく、うしろの君」と言ったとすれば、Yはその反応を受けて、既存の赴きを再構築する必要がある。また、

Yに視線を向けたまま、Xが「ちょっと来てくれる？」と言ったとすれば、Yは既存の赴きをコンテキスト化し、先行する「君」という発話と「ちょっと来てくれる？」という発話を一連の活動としてテキスト化することができるだろう。さらにこの手続きが、また次の〔知覚－行為〕の調整に役立てられるように、当該の赴きを更新するのである。このような手続きを積み重ねることにより、ある一つの行為が後続する行為と次々にテキスト化され、〔知覚－行為〕の連鎖による協応が、(社会的な)活動としての赴きを帯びる。また、見出された活動の赴きと次に知覚される出来事を照合することにより、その出来事が、先行する活動の進展に貢献する行為なのか、もしくは関連のない新たな活動の起点なのかを識別することが可能となる。

E. Gibson (1994) は生態学的な見地から、動物の振る舞いには「後見性」「予期性」「柔軟性」からなる「エージェンシー (agency)」が備わっていると述べる。つまり、我々がある一連の活動に参加するための行為は、それまでの出来事に基づいてその活動の現状を把握し (後見性)、その次なる展開に関するいくつかの可能性を想定しつつ (予期性)、実践されなければならない。また、たとえその行為の実践が予期せぬ結果を招いたとしても、そうしたフィードバックに基づいて速やかに次なる行為を、時には現状の把握そのものを修正し、臨機応変にその時その場に適切な立ち居振る舞いを実践していかなければならない (柔軟性)。こうしたエージェンシーの発揮にも、各参加者の内に見出される赴きが重要な役割を果たしているものと本稿では考える。

以下では、さらにいくつかの事例を分析することにより、この個人内の赴きと個人間の協応との関連について考察を深めることにする。

4 | 分析と考察

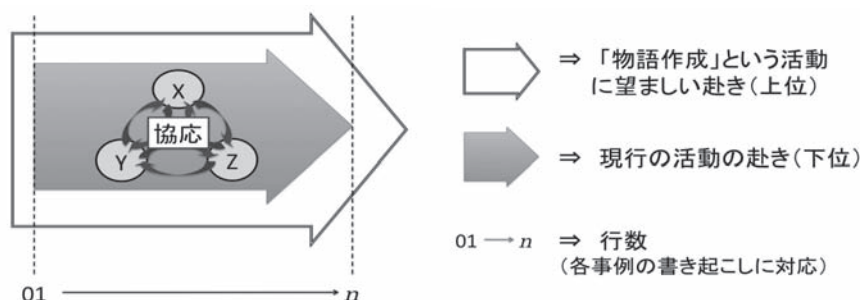
4.1 協応と赴きの関係

ここまでの議論によって、複数の参加者による会話においては、知覚的な側面と認知的な側面、すなわち、個人間の協応と個人内の赴きがその時その場の環境に適合するように調整されていることを示唆した。

認知的なプロセスの基盤となる枠組みとして、本稿で取り上げる会話事例では、次のような重層性を指摘することができる。まず、「数枚のイラストを選び、そこから連想される物語を作成する」という共同作業が、最上位の活動として予め設定されているため、共同作業の開始時点で既に各参加者の内には物語作成という活動の赴きが見出され、たとえばテーブルの上に配置されている種々のツール (クリアファイル、PC、メモ用紙など) は、そうした赴きを枠組みとして (即ち、物語を作成し記録するのに使用

するものとしての) 可能性が見出されるものと想定される。また、そうした上位の活動に埋め込まれた形で、より小さな活動(イラストの選択、内容の相談、PCへの入力など)が進められなければならない。そのため、各参加者の内には物語作成という上位の活動の赴きに状況づけられた下位の活動の赴きがその都度見出されることになる。つまり、本稿での会話事例において「その時その場に適合する調整」とは、図1に示すような状況下での相互行為を目指す試行錯誤であると想定できる。ただし、そのようないわば理想的な状況が容易に実現できるわけではなく、分析の対象となった事例の中には、あたかもそのような状況が避けられているかのようなケースも少なからず観察された。以下では、協応関係の調整と赴きの調整を実践するいくつかのパターンを分析してみる。

■ 図1 協応関係、および、赴きの調整 (モデル)



事例(2)は、被験者グループiiの会話の一部である。参加者たち(D、E、F)は、あるイラストに描かれている少女を物語の主人公とした。一通り物語の出だしが出来上がったところで、Dはその内容をPCに入力し始める。その傍らでEはFと協応しつつ、主人公の少女が描かれているイラストに似たシーンを含む、あるテレビ番組で紹介されていたCMについて語り始める。

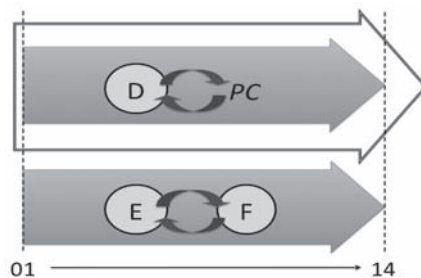
(2) グループ ii : 「世界の社会派CMベスト100」

- 01 E: なんのCMやったと思う? こういうシーンが、まったくおなじ
 02 シーンが出てきてん
 03 F: こういう感じの?
 04 E: うん、[こういう感じの
 05 F: [えー、なんだろう、化粧品とか
 06 E: や、あの、なんやろ、摂食障害? {F: うん} 食べ物が、食べられ
 07 なくなったり、とかー、{F: うん} 過食症っていうて、食べ、過
 08 ぎて全部吐いちゃうとかーなんか痩せたい女の子になっちゃう
 09 ー、{F: うんうんうん}
 10 [なんか、食べ物に対する強迫観念の病気があって、{F: うん}
 11 D: [(→PC) ##### (文章をつぶやき声で読む)
 12 E: それのー、hh CMでーこれが出てきた。だから、これ見たら、

■ 画像3 事例 (2) の様子



■ 図2 事例 (2) の調整状況



すことが可能になる。例えば、事例 (3) は、(2) で取り上げたEの語りが終了する前後のやり取りであるが、そのやり取りは、各参加者の内にEF間の活動を一時的な逸脱として意味づける赴きが見出されていたことを示唆するものである。

(3) グループ ii : プリマドンナ

- 01 E: っていう、むちゃくちゃ怖いCM [hhh
- 02 F: [hhh なるほどねー (3.0)
- 03 D: (→PC)バレエの、あの一、上手い人って、(→E)プリ、プリマドンナ?
- 04 E: (→イラスト)あつ、そうそう、プリマドンナ(1.0)(→サブモニタ)プリマドンナみ
- 05 たいに、舞台の上で、みんなの注目を浴びて、

2行目における3秒間の沈黙のあと、3行目でDは物語の主人公である少女の人物像に関してEに視線を向けて発話する。この2行目の沈黙は、EF間の活動の終了を示すものであると考えられるが、それを知覚したDは3行目の発話を、(2)の11行目の発話に比べて明瞭に行っており、明らかにそれがEに対する問いかけであることがわかる。それに対し、Eは手元のイラストに視線を落としたまま(そのため、EはDの視線に気づいていない可能性もあるが)、4行目で返答し、しかも、Dに対してではなく、PCの画面をミラーリングするサブモニタに視線を向けて発話を続ける。2行目まで続いていたEF間の協応関係が一時的な逸脱であるならば、その協応関係の解消はEとFが物語作成に直結する活動へ復帰できる状態にあることを意味することになる。Dが3行目で、それまでに自分が何をしていたかを説明することなく、一見唐突に主人公の人物像についての問いかけを行ったのは、現行のDの活動が最上位の活動に直結するものであり、EとFにとっていずれ協応し直すことになる活動であるため、EとFが現行のDの活動の赴きを当然見出しているとDが予測していたからであると考えられる。実際、Eが4行目でDに視線を向けることなく、Dの作成した文章が映し出されたサブモニタに視線を移していることから、3行目のDの問いかけが偶発的/一回的な出来事としてではなく、Eの内に適切に見出されたDの活動の赴きをコンテキスト化することで、その問いかけがそれまでのDの活動に関連した行為として即座にテキスト化され得たものと解釈できる。この一連のやり取りから、少なくともDとEの間では、円滑な

協応を実現できるほどに、各々の内に見出された活動の赴きが互いに類似しているものと考えられる。

4.2 非協応的な活動

参加者間で赴きが十分に類似しているということは、その参加者間の同調的な協応をもって確認することができる。しかし、参加者間で互いの振る舞いを制御し合うような相互能動的な関係を構築せずに、同種の活動が個別に実践されることも可能である。すなわち、赴きが互いに類似する活動を各々実践しているが、その間に協応関係が成立していない場合である。本稿ではそのような活動を非協応的な活動と呼び、以下でその様相を分析する。

事例(4)は、グループiiiの会話である。参加者たち(G、H、I)は物語の途中で料理を作る場面を設定し、その場面で使用可能な食材を含むイラストや写真を探している。作業中、Gが落の写真を見つけるが、Hはその写真に気づいていなかった。3行目からGがその理由を話し始める。

(4) グループ iii：食材探し

01 G: これ要らない? [落]

02 I: [トリュフみたいの売ってる、##]

03 H: [落は、落は、]

04 嫌いなんて意識的に避けたのかな

05 G: あれ、繊維質が、たっぷりじゃない

06 I: えー落嫌いななの?

07 H: うん

08 I: おいしいのに

09 G: じゃあ、あそこの研究室、

10 H: #####

11 G: hhそうそうそう

12 I: や、あれは食べなくていいけどhhh

13 G: そうだよーあれー、なんであんなー、あ、レモンがありますよ

14 H: あ、レモン (→レモンの写真)

15 G: レモン (→H)

16 I: レモン (→レモンの写真)

(4)における「食材の写真探し」の活動は、1、2、3行目で発話が重複しているものの、Hが3行目の発話を4行目で「継続」¹¹⁾し、この重複は適切に修正されているため、全体としては協応関係が適切に調整され参加者間での同調が実現しているといえるだろう。3-4行目のHの発話によって一時的に落が話題として(再)導入され、4-13行目では落を話題にする発話が互酬的に繰り返されている。しかし、その間、各参加者は他の参加者へ時折視線を向けることはあるものの、概ねファイルや手元の写真に視線を落とし、写真探しの活動も同時に続けている。つまり、参加者たちは、主

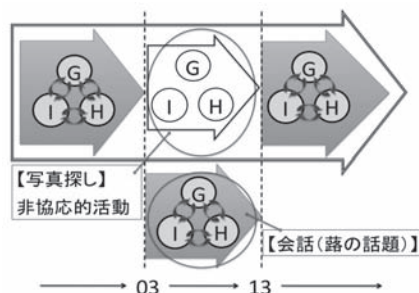
▼11 串田(2005)は、「オーバーラップした発話部分の統語的手続きとなるようデザインされた発話を行って自発話を完成させる手続き」を「継続(continuing)」と呼び、また「オーバーラップした発話部分(の一部)をそのまま(あるいは若干の語句の変更を加えて)反復再生して自発話を完成させる手続き」を「再生(recycling)」と呼ぶ(p.30)。

に発話と聴知覚を通して現行の会話（落の話題）に参加し、且つ、主に視知覚と触知覚を通して写真探しを続けていたことになる。すなわち、この状況において各参与者の内には、「落についての会話」と「写真探し」という2つの活動の赴きが見出され、保持されているものと考えられる。ただし、この間の写真探しには参与者間の協応が観察されない（図3）。3-13行目では、落についての会話を進める上でのみ協応関係が調整され、写真探しは、各参与者が個別に実践する非協応的な活動として継続されていることになる。

■ 画像4 11 G: hhそうそうそう



■ 図3 事例（4）の調整状況



そのため、13行目後半でGがレモンの写真を知覚し、落についての会話を突如打ち切って「レモンがありますよ」と発話すると、この発話に他の2名は何の躊躇もなく反応し、3名は改めて写真探しの活動を築き始める。それと同時に、一時的に築かれた落に関する会話での協応関係は立ち消えとなり、その後は落の話題で会話をする事はなかった。この13行目後半のGの発話を起点とした協応関係の即時反射的な調整／切り替えは、写真探しが非協応的にでも継続され、各参与者の内にその赴きが保持されていたことに負うところが大きい。各参与者の内に写真探しの赴きが存在していたからこそ、Gによる13行目の発話を即座にその活動に関連づけることができたものと考えられる。非協応的にでも活動を継続し複数の赴きを保持することは、ある活動からもう一方の活動へと即座に協応を転換することを可能にすると言えるだろう。

4.3 協応を促す行為

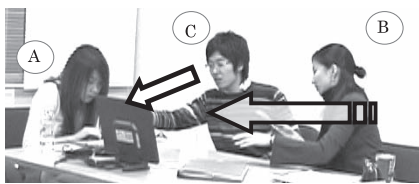
事例（1）で取り上げた場面の直後、グループでは物語作成の足がかりとなるイラストを、まずは一人二枚ずつ取り出すことにした。ところが、Bが二枚目のイラストを選ぼうとしていたときにAがPCのキーボード入力に不具合があることに気づく。事例（5）はその直後からの会話である。尚、（5）には、Aの視線を表す記述が割愛されているが、Aは終始、PCのキーボードと画面を交互に見ており、他の参与者に視線を向けることは一度もなかった。

- (5) グループ i: キーボード入力
- 01 B: (→クリアファイル) あす、んあ、えー、どうしよう
- 02 A: 誰? ローマ字にしたの
- 03 C: (→A) 知らない、(下を向く) 触ったら変になってた
- 04 A: 絶対お前だろ {C: ## (→A)} しかも戻んねーよ、これか、おー?
- 05 B: (→イラスト) これいいなー (→サブモニタ)
- 06 A: 半角アルファベットそのまま [入力しますになってる
- 07 C: [これじゃない? (キーボードを押し
- 08 す) これ押してこれ押したら
- 09 A: 何しとるねん、何しとるねん
- 10 C: あ? {B: hhh} これで、できない? (キーボードを連打)
- 11 ほら、いーいーって
- 12 A: ぶっ [殺すぞー
- 13 B: [いや違う違う、なんか、(Cの前に上体を倒し、Aの手元を
- 14 指して)「かな」っていうところあるしょ
- 15 C: あ、下だし、あ、これだこれ (Aの手元を指して)、これこれ、こ
- 16 のへんにあるしょ
- 17 A: これ? (キーを押し) 違うぞー
- 18 C: 下、下ですよ、(サブモニタを指して)ここらへんのやつ、{B: (→
- 19 イラスト)} あ、このへん
- 20 A: これか?
- 21 B: せーのっ (選んだイラストを持ってA、Cの方に上体を傾ける)
- 22 C: せちがちがちがう、“a” って、“a” って出てるやつ
- 23 A: エー? (→PCの画面/カーソルを動かす)
- 24 C: そ、それやってみて、(→Aの手元) そうそうそれで、
- 25 [青、青、青 (PCに手をのばす)
- 26 B: [(→イラスト) とりあえず作ろうよー

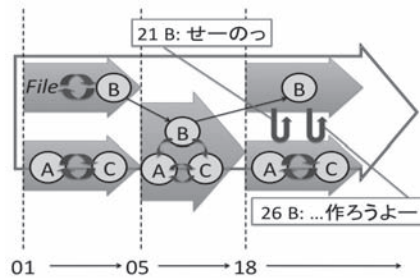
5行目までのBの振る舞いに注目してみると、ここではこの場面ではBの活動とAC間の活動が異なるものであることがわかる。Bはこれ以前までの流れに沿って作業を続けており、クリアファイルにあるイラストに関する発話(1行目、5行目)を行っているが、他の二名はそのBの発話を聞き流し、PCの入力設定を元に戻そうとしている。しかし、5行目の終わりでBはAC間のやり取りが間接的に知覚できるサブモニタに視線を向け、AC間の活動に加わろうとする態度を見せる。そして、13行目で明確に上体をACの方へと倒し、Aの手元を指さして入力設定の改善に貢献する発話を行っている。その直後にCもAの手元を指さし、Bの行為に同調している。このことから、13行目の前後では、3者間で協応関係が調整されつつあるように見受けられる。しかし、18行目の終わりにBは再び手元のイラストに視線を戻し、ACとの協応から離れる。

注目すべきは、21行目と26行目におけるBの行為(下線部)である。これらの行為は、他の2名に対して、Bの活動へ参加することを促すものと

■ 画像5 26 B: とりあえず作ろうよー



■ 図4 事例(5)の調整状況



捉えるべきだろう。ただし、これらの行為は、他の2名から反応を受けることなく、聞き流されてしまうため、Bは結果的には他の参与者と協応関係を成立させることができなかつた。この結果から考えて、まず18行目以降のBは、AC間の活動が一時的で、その時点では（Bが進めようとする活動に比べ）継続に値しないものとしてその赴きを見出しているものと考えられる。一方、AとCは入力方法の改善を目指し、現行の活動に赴きを見出しているものと思われる。AはCからの助言を参照しつつ、PCに対して行為を仕掛け、そのフィードバックを知覚しながら試行錯誤を繰り返している。またCはそうしたAの試行錯誤（〔知覚－行為〕）を自らの内にある赴きと照合し、自らの行為を、Aの行為を適切に修正するものとして調整している。つまり、AC間では協応関係を維持できるほどに、各々の内にある赴きが類似していると言えるが、Bの内にある赴きは、それとは幾分異なるものとなっており、そのため、BとACとの間で協応関係が成立しなかつたものと考えられる。

参与者が3名以上の多人数会話の場合、参与者間の赴きが異なり、協応関係が分離することも少なくない。そのような状況が円滑な会話の構築へと調整されるには、参与者間に認知的なレベルである程度の「一致／類似」が不可欠であると言えるだろう。

5 | まとめ、および、今後の課題

本稿では、先行研究による知見をもとに、まずは会話における知覚的な側面、即ち「動くための情報探索」と認知的な側面、即ち「理解するための情報処理」との関連を再考し、そのうえで、両側面を有機的に接合するための段階として、赴きを見出す推論的な過程を設定した。本稿では、この赴きの影響で〔知覚－行為〕の連鎖はより社会的なものとなり、我々の日常的な活動の実践に適うものへと調整されると考える。さらに、具体的な会話事例をもとに、参与者間における2つの調整、即ち、〔知覚－行為〕の相互作用を実現する協応関係の調整と、協応によって構築される種々の

活動の次なる展開を予測する基盤となる赴きの調整に注目し、両調整の実践についていくつかのパターンを分析・考察した。特に赴きの調整は、自己が進める活動にだけでなく、他者の活動にも赴きを見出し、二つの活動の赴きが各参加者の内で各々区別され、対比されつつ、更新されているものと考えられる。ただし、あくまで赴きは個人の内に閉じた認知プロセスによって見出されるため、参加者間での類似性を保つことは容易ではない。各参加者の〔知覚－行為〕を通して、その類似性をどのように調整するかが、協応関係の成立／不成立に影響しているものと考えられる。

本稿で提唱した赴きを巡る議論は、更に精緻化する余地が十分に残されている。本稿におけるデータや手法で可能な「認知」の議論には限界がある。しかし、赴きに焦点を当てて分析を進めることにより、具体的な会話事例に基づきながらも、一歩個人内の認知へと踏み込むことが可能になった。今後の課題としては、まず知覚可能な事象と赴きの関連をより緻密に分析することが挙げられる。その過程で、さらに個人内の認知へと踏み込む手段が明らかになるかもしれない。その際に本稿とは異なるデータや手法の必要性が示唆されることも考えられるが、そのような新たな方向性を見出す意味でも、赴きと協応の相関関係について更に分析・考察を進めていかなければならない。

■ 付録 書き起こしデータの中で使用される表記凡例

[発話や非言語的な振る舞いの重なりが始まる時点
(イタリック)	非言語的な振る舞いに関する著者のメモ
→	視線の向き (「→X」は「Xへ視線を向ける」)
(数字)	沈黙の期間：1秒単位
,	音声的な区切り (一秒未満の短いポーズを含む)
—	音の伸ばし (相対的に際立つ長さでない限りは1つで表記)
?	上昇調のイントネーション
{ }	差し挟まれた発話や非言語的な振る舞い
#	聞き取り困難な発話
h	呼気 (主に笑い声)

参考文献

- Gibson, E. J. (1994) Has Psychology a Future? In *Psychological Science*, 5: pp. 69-76
- Gibson, J. J. (1966) *The Senses Considered as Perceptual Systems*. Boston; Houghton Mifflin Company.
- Gibson, J. J. (1967) New Reasons for Realism. In *Synthese*, 17: pp. 162-172
- Gibson, J. J. (1979/1986) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Psychology Press. (古崎敬他訳『生態学的視覚論』サイエンス社1985)
- Goodwin, C. (2000) Action and Embodiment within Situated Human Interaction. In *Journal of Pragmatics* 32: pp. 1489-1522
- Goodwin, C. (2002) Conversational Frameworks for the Accomplishment of Meaning in Aphasia.

- In Goodwin, C. (ed.), *Conversation and Brain Damage*. Oxford and New York; Oxford University Press.
- Goodwin, C. (2003) Pointing as Situated Practice. In Kita, S. (ed.), *Pointing: Where Language, Culture and Cognition Meet*. Hillsdale, NJ; Lawrence Erlbaum.
- Goodwin, C. and Goodwin, M. H. (1996) Seeing as a Situated Activity: Formulating Planes. In Engestrom, Y. and Middleton, D. (eds.), *Cognition and Communication at Work*. Cambridge; Cambridge University Press: pp. 61-95
- Mey, Jacob L. (2001) *Pragmatics: An Introduction*. Malden: Blackwell. (小山亘訳『批判的言語学入門—社会と文化の言語』三元社2005)
- Reed, E. S (1996) *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford University Press. (細田直哉訳『アフォーダンスの心理学—生態心理学への道』新曜社2000)
- Sacks, H., Schegloff, E. A. and Jefferson, G. (1974) A Simple Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. In *Language*, 50(4)-1: pp. 696-735
- Silverstein, M. (1993) Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In Lucy, J.A. (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Pragmatics*. Cambridge University Press: pp. 33-58
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre (1995) *Relevance -Communication and Cognition, 2nd ed.* Blackwell.
- 岡田美智男 (1996) 「対話とは何か」『言語』25 (1) : pp. 56-63
- 岡田美智男 (1997) 「Talking Eyes—対話する「身体」を創る」『システム/制御/情報』41 (8) : pp. 323-328
- 岡田美智男 (2003) 「ヒトとロボット：共同性とその成立基盤を探る」『発達』95 (24) ミネルヴァ書房 : pp. 61-70
- 岡田美智男 (2008) 「コミュニケーションに埋め込まれた身体性—ロボット研究からのアプローチ」『言語』37 (6) 大修館書店 : pp. 56-63
- 喜多壮太郎 (1996) 「あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』15 (1) : pp. 58-66
- 串田秀也 (2005) 「参加の道具としての文—オーバーラップ発話の再生と継続—」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房 : pp. 27-62
- 串田秀也 (2010) 「言葉を使うこと」串田秀也・好井裕明編『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社 : pp. 18-35
- 小嶋秀樹・マーク ミハロフスキ (2007) 「リズムをとおして人を惹きつけ人を動かすインタラクティブロボット」 http://www.ri.cmu.edu/pub_files/pub4/kozima_hideki_2007_1/kozima_hideki_2007_1.pdf
- 小嶋秀樹・マーク ミハロフスキ (2009) 「ロボットとのインタラクションを支えるリズム」『言語』38 (6) : pp. 34-41
- 小山亘 (2009) 「シルヴァスティンの思想 社会と記号」小山亘編/榎本剛士・古山宣洋・小山亘・永井那和共訳『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡』三元者 : pp. 11-233
- 小山亘・綾部保志 (2009) 「社会文化コミュニケーション、文法、英語教育：現代言語人類学と記号論の射程」綾部保志編『言語人類学から見た英語教育』ひつじ書房 : pp. 9-85
- 佐々木正人 (2001) 「アフォーダンスの構想の源—ギブソン知覚システム論」佐々木正人・三嶋博之編訳『アフォーダンスの構想—知覚研究の生態心理学的デザイン』東京大学出版会 : pp. 7-45
- 佐々木正人 (2008) 『アフォーダンス入門—知性はどこに生まれるか』講談社
- 菅原和孝 (1997) 「会話における連関性の分岐—民族誌と相互行為理論のはざまで—」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社 : pp. 213-246
- 西阪仰 (1995) 「関連性理論の限界」『言語』24 (4) : pp. 64-71
- 西阪仰 (2005) 「複数の発話順番にまたがる文の構築—プラクティスとしての文法II—」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房 : pp. 63-89
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会

宮崎清孝・上野直樹（1985）『視点』東京大学出版会

山梨正明（2000）「関連性理論のアプローチの批判的検討」『英語青年』146（7）：pp. 427-430

（2010年9月27日受理、2011年1月13日修正原稿受理、2011年2月9日採択）